
スローボート

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スローボート

【Nコード】
N5069A

【作者名】
並盛りライス

【あらすじ】
一時間三百円のボートに乗って、僕は彼女にある秘密を打ち明ける。

僕らは漂っていた。

一時間三百円の小さなボート。

会って三回目のデートは予想以上に上手くいった。

会話もはずんだし、彼女との距離も少し近づいた気がしていた。

ボートは小刻みに揺れて、僕はオールを静かに漕いだ。

彼女は遠くを見るように景色を見ていた。

悪くない沈黙だった。

今なら、僕の秘密を打ち明けられる気がした。

水はどこまでも静かで、僕らを包んでいる。

彼女を紹介してくれたのは、古い友人の一人で、僕の秘密を知っている数少ない一人だった。

僕は、男の子が好きだった。

変な意味じゃなくて、ただ単に：自然に好きだった。

さっぱりしていて、後腐れがなくて、本音で話ができるのが好きだった。

それがある日、不自然なことだつて気付いた。

悩んだし、苦しんだ。

自分は周りの人間とは異質で変なんだつて思えた。

自分が汚いとさえ思っていた。

午後三時の空は僕らのボートに優しい陽だまりを注いでいる。

彼女は、気持ち良さそうにあくびをして、恥ずかしそうに僕の顔を見た。

僕はまだ話せずにいた。

僕は一度だけ告白したことがある。

勇気を出して渡したラブレターを目の前で破り捨てられて

「気持ち悪い」

と云われた。

彼とはそのあと話してはいない。

もともと口数が多い方じゃなかった僕はさらに、目立たなくて静かになった。

今日、僕は彼女に秘密を話す。

話さない方が良いのかもしれない。

でも僕は、話すことにした。

いつまでもボートが陸につかないように、オールを湖に沈めてしまおうかと思った。

最初のコトバは決まっている。

「僕は君のことが好きだ。でも僕は昔……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5069a/>

スローボート

2010年10月20日13時59分発行